

笠置上人貞慶と聖徳太子信仰

——『太鏡百鍊鈔』所収の三種の資料をめぐる——

兼 子 恵 順

笠置上人貞慶（一一五五～一二二三）は、法相教学の興隆、戒律の復興、笠置寺の整備と弥勒信仰の流布、「興福寺奏状」と専修念仏の停止など、多くの事跡を以て知られるが、著作も多く、殊に願文・講式・諷誦文の撰述に於ては、当代稀に見る多作の人であった。本稿では、聖徳太子信仰に関する唱導資料をめぐり、少しく考えたところを述べてみたい。

貞慶の太子信仰に関する資料は、その撰と伝えられる『太子和讃』『聖徳太子講式』を始め、『観音講式』『笠置寺十三重塔造立願文』などが知られるが、聖云素観の撰になる『太鏡百鍊鈔』下巻末には、「太子八相文残篇」「太子徳讃義残篇」「聖徳太子講」と題する三種の文書が収載され、「太子八相文残篇」に「如意抄云笠置解脫上人御作」「（朱書）為求仏房太子供養草之云々」、

「太子徳讃義残篇」に「讃仏乗抄云笠置上人御作文」「（朱書）承元三己巳十一月十日供養之十五十五才」、「聖徳太子講」に「以笠置上人御真筆本書之」（朱書）高倉天皇御也、「（朱書）癸巳二月廿二日用之」とあって、いずれも貞慶の撰になるものであることを明示し、また「聖徳太子講」の後に

は、採録の趣意を誌して「予幸求得上人兩三箇之先蹤、式結置太鏡百鍊鈔之終詞、以之為稱揚懸鏡之肝要、以之為讃嘆饒花之手本、風月之得意有便、儒道之流筆無滯、写此様嚴微言而已」とある。

『太鏡百鍊鈔』は、全三巻からなる書である。本書の伝本は、大東急記念文庫に康暦元年（一三七九）の写本三軸が架蔵され、大和文華館（安政四年写・鈴鹿文庫旧蔵）と法隆寺に、その転写本が架蔵される。撰者の聖云素観は「常楽寺開山」「菩提寺（橘寺）ノ聖云素観長老」「太子伝博達ノ人」などと伝えられる人で、他に『太鏡鈔』十二巻、『太鏡底容鈔』六巻の著作がある。いずれも『聖徳太子伝暦』の末書であるが、本書下巻の跋文に自著を称して「橘寺餘流太子伝自作未書」とある如く、聖云の著作は、中世の代表的な太子伝学の師であり、『上宮太子伝拾遺記』『聖徳太子平氏伝雜勘文』（正和三年（一二三四）成立）の撰者である橘寺の長老法空の所説を継承し、これを基礎に私案を加えたもので、主として『伝暦』

の記述に関する橘寺系の秘事・口伝の伝書である。本書所収の当該文書については、貞慶に於ける太子信仰の蹤跡であり、「式」として太子への称揚・讃歎の肝要となし手本となすべきことが、前掲の採録の趣意文に見える。

本書は、『国書総目録』に収録され、太子伝関係の論致に記述の一部が紹介されるなど、既に存在の知られる文献である。それ故、その収載記事は新出資料とは言いが、当該文書については、管見ではなお能く存知せられていないものの如くである。当該文書が「真撰」として承認されるとすれば、貞慶の太子信仰を検証するための好個の資料を得ることになり、また発掘と紹介が進められつつある貞慶の唱導資料に新たな領域を加えることにもなるが、以下にその可能性を探ってみた。なお、本書の引用は、大東急記念文庫蔵本（原本未見の故、慶応大学斯道文庫撮影の複写本）によった。

本書の撰時については、これを明記するところはない。また撰者聖云の生没年時も判然としないが、本書下巻奥書に見える聖云の追記には「右於太子伝者、依為先師橘樹寺長老之面授口決、忝預 先帝後醍醐天皇之勅請 叡問、繇茲製作此末文、将伝彼末葉、仍為証明加判形而已」（この追記は、もとと尾題のすぐ後にあったものらしく、奥書によれば文和四年（一二三五）、本書を書写した橘寺の住持寛瑜が「常楽寺聖云上人製作太子伝末文証明事」の題を附して表紙に書き移したものを、のち康暦元

年に至り、東大寺戒壇院別房に師主某の草本を以て本書を書写した東大寺僧高深が、師主の命によって現伝の位置に書き移したことが知られる）とあつて、本書或いは本書を含む聖云の著作は、橘寺長老法空の面受口決に依拠したものであり、後醍醐天皇（在位一二八〇—一二三九）の勅請・叡問に与つたものでもあると述べていることからすれば、本書の撰時は、鎌倉末期から南北朝初期にかけての時代とみてよい。この判断に従えば、本書への当該文書の採録は、建暦三年（一二二三）二月の貞慶入寂後、およそ百二十年前後の比較的早い時期であつたことになる。

次に当該文書の構成・内容等については、先ず「太子八相文残篇」は、『伝暦』記載の太子の事跡を釈尊一期の「八相成道」に擬し、入胎・誕生・降魔・擬成道・出家志・転法輪・入涅槃の各相に配するもので、これに表白「夫上宮太子者、我国世尊也、金人入夢之始、早示普現三昧之応用、白鳥守墓之終、猶振神境智通之威力、倩聞四十九年之在世、宛同釈尊一代之儀式、泣思五百餘歳之伝灯、不異遺法三時之流布、徳重恩深士女猶知」が付されていたものらしい。求仏房の太子供養に草したものであることを朱書注記する他、撰時・年齢共に不明であるが、聖云は「予得笠置上人之御書、案太子八相之始終、此八相者、闕一相也」「予云、上人御書八相者、只有道理之時、全無年月之時、若依年月之時代、正立八相之

次第「予以笠置上人の御義、謂遺法三時之流布……自冷泉院御宇以来、是末法時分也」などと私案を添える。なお、聖云が「太子八相文殘篇」の典拠とする「如意抄」については、東大寺圖書館に「延応元年暮冬廿六日書之了」の奥書（表紙「曆仁二年無射五日」）をもつ『如意抄』が架蔵される。本書は貞慶に關係するかと思われる南都の唱導文獻であり、書写の延応元年（一二三九）は、貞慶入寂の二十六年後に当たる。現伝本の形態からは増補分冊や藍本の一部である可能性も考えられるが、写本一冊に慈恩大師基・阿弥陀如来造立開眼供養・北観音寺（清水寺）座主某堂舍供養に關する文書三篇が、「此大師御草、以御真筆折紙書之」「書本御自筆也、其記云、元久二年三月十三日、於笠置南谷湯屋石蒸之間書之云々」などの文中識語を伴って収載される。右の識語に見える元久二年（一二〇五）は、貞慶の笠置寺移住（建久四年）の十二年後に当たる。現伝本には「太子八相文殘篇」に該当する記述はなく、本書と「如意抄」との同異は定かでないが、斯かる書物が伝存することは注意すべきことであろう。

次に「太子德讃義殘篇」は、「欽明無為之代、写教伝我朝、然而朝議紛紜、彼此異論、王臣踟躕、法化未普、爰上宮太子、依救世之誓願、誕豐日之玉宮、挙一州之機根、施三宝之弘通」「是以六百余歳之間、六十餘州之内、現身軛禍為福……淨土菩提、下自一称一礼之善、上至十善三乘之行、四衆八部、在

笠置上人貞慶と聖德太子信仰（兼 子）

家出家、殖其善種、貯其良因者、一恒河之砂不数、十方仏之智難量、皆是救世観音和光之方便、上宮太子利生之化宜也、仏法の伝来、中宗之濫觴、皆是観音御力也」「慈恩大師又為観音化身、為三蔵写瓶、製百本章疏、貽千代遺葉、又聖武天皇光明皇后、多建寺塔、大発仏法、又鑒真和尚戒律之大祖、負浮壺来我国、中算大徳尺門之領袖、制書記弘我宗、皆是大光普照之垂跡、観音大士之応現也」とあるなど、救世観音の化身としての太子の在世滅後にわたる利生方便と、観音の応現による仏法の流伝・興隆を略述し、さらに法相宗との關係を強調しつつ太子の靈異勝事を讃歎するもので、承元三年（一二〇九）十一月十二日、貞慶五十五歳時の撰になることを注記する。なお、聖云が「太子德讃義殘篇」の典拠とする「讃仏乗抄」は、諸家の願文・諷誦文等を集成するもので、元来は膨大な規模の唱導文獻であつたと推定されるが、多くを散逸し、現在はその一部が東大寺圖書館と金沢文庫に伝存する。編者は、安居院の聖覚とも東大寺の宗性など貞慶の周辺の人とも推測される。興福寺周辺の唱導資料を多く伝えており、寛元四年（一二四六）、宗性の書写になる東大寺圖書館蔵本には、貞慶の撰になる願文・諷誦文数篇が伝存する。現伝の『讃仏乗抄（鈔）』には「太子德讃義殘篇」に該当する文書は見えないが、貞慶撰とされる文書が、「讃仏乗抄」を典拠として収載されていることは注意すべきことであろう。

次に「聖德太子講」は、太子の忌辰に催された講經談論の表白文であり、「敬白〇言、方今信心大法主權長官上綱、擬報恩之至誠、抽謝德之深慮、当上官太子之忌辰、開講經談論之齋席之有矣、其御志何者、夫聖德太子者、倭国天子之儲君、仏法伝灯之大祖也、受髮膚於用明之賢主、執国柄於推古之聖代、母后懷孕之夢、金人入口、太子降誕之朝、光瑞驚眼、岐疑過人」「釈教東漸以來法化未洽、太子出世之後、弘通更盛、建寺塔度僧尼、海内漸驚法雷之響、写經論製疏記、縑素悉受甘露之潤、皆是聖德太子之善巧、大光普照之神力也」などであつて、太子への報恩謝德としてその事跡を讃歎し、「決沢之梵筵」を修する趣意を述べる。承安三年（一二七三）二月二十二日、貞慶十九歳の時の撰とされ、『太鏡百鍊鈔』への採録は、貞慶の「御真筆本」に依拠したことを特筆する。

当該文書の概要は以上の如くである。もとより各文書はそれぞれに独自の構成・内容を有するが、太子の事跡に関する記述は、いずれも『伝暦』の所説を基本とするもので、文書相互に内容の矛盾する所はない。太子の事跡について『伝暦』を基本とすることは、貞慶の他の著作にも共通する。また、いずれの文書も太子の遺徳への讃歎・報謝を表明するが、より特色ある太子観は、太子を救世観音の化身と観る立場を基盤として、「太子八相文残篇」「聖德太子講」では、太子の事跡を釈尊一期の事跡に擬すること、また「太子徳讃義残篇」

「聖德太子講」では、太子を法相宗の流伝や興隆に結び付けることにある。殊に前者は、所伝の撰時が確かであれば、親鸞の「和国之教主聖德皇」に先行する太子観として注目されるが、「太子八相文残篇」に「夫上官太子者、我国世尊也……倩聞四十九年之在世、宛同釈尊一代之儀式」、「聖德太子講」に「凡四十九年之済生、宛如釈迦尊八相……誠是迦土之如来也」とあつて、その記述は極めて類似する。また後者は、「太子徳讃義残篇」に「仏法之伝来、中宗之濫觴、皆是観音御力也」「中算大徳尺門之領袖、制書記弘我宗」「春日大明神、護景雲遷御笠山、朝々暮々護応理之教法、時々尅々守興福之精舍、由之維摩堂静、槐壇之煙五百餘廻、唯識窓深、螢雪之光三千餘所」「而春日第四宮即観音之垂跡、太子一体」、「聖德太子講」に「是以上綱為謝彼伝灯之宏恩、寧修此決沢之梵筵、講讀一乗之妙文、論談三性之奥理」「興福伽藍、繼法輪於三会」などに見えるが、これらの文が法相宗の立場から書かれたものであることは明瞭であらう。なお、前者については金沢文庫蔵本『讚仏乘鈔』の「三十三人観音値遇海住山本堂修造勸進帳」（撰時・撰者不詳）に「彼聖德太子者我等世尊也、粗聞一期之化儀、宛同八相之成道」とあるものが注目される。本文書にはまた「爰我朝者観音大士有縁之地也、靈仏之多国、名神之聞世、十之八九無不観音」などであり、仏法の流伝・興隆を観音の応現と観る「太子徳讃義残篇」や「況至我朝者。濫觴

異他。尋而可信。是以聖德太子為弘仏法自來東海。始建四十
六箇之伽藍……雖知救世觀音之方便……处处靈驗多為觀音。
諸社神明本地雖區。威光甚者亦觀音垂跡歟。受生於我國之人
誰疑觀音之機縁……などある貞慶の三段「観音講式」とも共
通した立場を示す。観音值遇・補陀落往生を欣求する貞慶が、
笠置から観音寺（海住仙寺）に移住したのは承元二年（一二〇
八）のことであり、「太子徳讃義殘篇」の撰時と伝えられる翌
三年には、七段の『観音講式』を草している。

次に当該文書の撰時については、「太子八相文殘篇」に「泣
思五百餘歳の伝灯」、「太子徳讃義殘篇」に「爱上宮太子、依
救世之誓願、誕豊日之玉宮、挙一州之機根、施三宝之弘通
……是以六百余歳之間、六十餘州之内、現身軀禍為福、除病
延命、後生離苦得脱、浄土菩提」、「聖德太子講」に「六百餘
歳之遺教」とあるものが注目される。「太子徳讃義殘篇」の
「六百余歳」が太子の誕生以来の年数であることは明らかで
あり、年数の違いは「伝灯」「遺教」によるものと解される
が、『伝暦』に基づく太子の生年（五七二・没年（六二二）に
六百餘歳・五百餘歳を加えれば、貞慶の時代はほぼこれに相
当することになる。因みに「聖德太子講」の撰時は一一七三
年とされるが、太子の生年に仮に六百年を加えれば一一七二
年となる。また「聖德太子講」には「彼自後漢至太宋一千餘
年、自欽明至皇朝四十八代、權化実類之弘仏教、君王人庶之

施聖行、靈異事雖多、未聞如太子」とあるが、欽明天皇より
数えて四十八代目（室町時代以前故に弘文天皇を除く）の「皇
朝」は、第七十七代後白河天皇（一一五五～五八）の朝廷に相
当する。貞慶の誕生は、第七十六代近衛天皇の治世、久寿二
年（一二五五）五月のことであるが、七月に同天皇は崩御し、
継いで十月には後白河天皇が即位しているから、右の「皇朝」
は貞慶の時代と符合することになる。なお、後白河天皇は、
保元三年（一一五八）、二条天皇に讓位すると直ちに第一次の
院政を開始しており、「聖德太子講」の撰時と伝えられる承
安三年は、この時期に含まれる。鳥羽上皇の院政は後白河天
皇の在位中、既に保元元年七月で終わっているから、朝廷の
実権は後白河天皇から同上皇へと継続されていたことにな
る。祖父の藤原通憲（信西）をはじめ、叔父の成範、静賢、
澄憲など、貞慶の周辺には後白河上皇と関係浅からぬ人々が
いたことも、撰時考定の手掛りとなるろうか。

管見では、『太鏡百鍊鈔』の他に当該文書の引用例を見な
い。明確な決め手を欠くが、当該文書は貞慶の著作として可
能性の高い資料の如くに思われる。（註は省略する）

*東大寺図書館並びに同館の横内裕人氏に記して深謝の意を表する。

〈キーワード〉 貞慶、太子信仰、唱導資料、太鏡百鍊鈔

（四天王寺国際仏教大学教授）

“the lesser vehicle” which the historical Śākyamuni preached in his time with “the great vehicle” which arose after the death of Śākyamuni by using the Huayan school’s hermeneutical scheme of the five kinds of teaching. In his view, both kinds of vehicles become the one practical path to becoming Buddha. From a historical point of view, Fujaku’s theory is the early modern Buddhist’s answer to the problem that the historical Buddha could not have preached the Mahāyāna sūtras.

51. A Study on Japanese Buddhism from the Radius of Buddhist Civilization

Shunji HOSAKA

52. Bibliographical Study of *Yuzu Enmonsho*

Takashige TODA

The general headquarters of the Yuzu Nembutsu sect is located in the Dainembutsu-ji temple, in Hirano ward, Osaka.

The Holy Saint Daitsu (1649–1716) got official approval to re-establish this sect in 1688, the first year of the Genroku era, in the Edo period.

He achieved several things during his lifetime. For example, he published the *Yuzu Enmonsho* in 1703, the 16th year of the Genroku era, and the *Yuzu Nembutsu Shingesho* in 1705, the 2nd year of the Hoei era. The first one exists neither as an original book nor in woodblock form. The other exists only as woodblocks. However I have found the book name *Yuzu Enmonsho* in the *Danrin Shingi narabi ni Jo* of 1696, the 9th year of the Genroku era.

Bibliography has proved that the oldest written source is the printed book of the *Yuzu Enmonsho* from 1834, the 5th year of the Tempo era. It had a role regarding permission to enter the sect, as any person who wanted to enter the sect had to memorize the *Yuzu Enmonsho*.

53. Priest Jōkei and his Faith in Prince Shōtoku in Light of the Materials in

the *Taikyōhyakuren-shō*

Keijun KANEKO

The paper is mainly intended to make clear the faith of Jōkei, a Buddhist priest of the Japanese Hossō sect, in Prince Shōtoku. It is necessary at first to decide the authorship of the three works preserved in the *Taikyōhyakuren-shō*. If these works were really written by Jōkei, following his view of the prince as the incarnated goddess of mercy, we could verify his strong faith that the life of the prince is likened to Buddha. Jōkei again accepts the prince as being one who contributed to the prosperity of the Hossō sect.

54. The *Pañca-dharma* and the *Dharma-kāya* associated with *Ri* (理) and *Chi* (智)

Toshihiro ADACHI

Gyōshin, who belonged to the Hossō-shū in the Nara era, had a peculiar view of *hosshin* (法身, *dharma-kāya*) that was associated with *ri* (理) and *chi* (智). In the *Ninnōkyōsho*, he postulated that *ri-hosshin* (理法身) had the nature of *shinnyo* (真如, *tathatā*) and *chi-hosshin* (智法身) had the nature of *shi-chi* (四智, *catvārijñānāni*). However, it has never been reported that Gyōshin possesses a view such as the one indicated above. A background of his thinking can be found in Huizhao's *Jinguangming zuishengwang jingshu*. Huizhao described the Dharmakāya of the *Jinguangming zuishengwang jing* through the words *ri* and *chi*, and equated it with the Dharmakāya in the broader perspective of *Chengweishi lun* whose nature was explained to be like that of the five elements (五法, *pañca-dharma*).

55. Observations on the Texts Quoted in Myōe's *Zaijarin* and *Shōgonki*

Mieko YONEZAWA

Zaijarin (1212) and *Shōgonki* (1213) were written by Myōe (1173-1232) as a series of critiques of Hōnen's (1133-1212) *Senchakushū* (1198). At the begin-